

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日連綿若野的休本誌創刊第六二七号
今期五年十一月一日発行二第百二十六卷第十一号

ホトトギス

十一月号



風雅の小筥（六十九）

廣太郎

丸ビルから始まり、三菱ビルまで、東京の丸の内という場所にホトトギス社は事務所を構えているわけであるが、所謂テナントビルという事でビルの同じ階には色々な会社が入っており、それぞれ御縁があつたという経験もある。丸ビル時代、隣にあつたテナントは弁理士事務所であり、ひよんな事から「ホトトギス」のロゴ、マーク等の商標登録をしてもらい、日本伝統俳句協会の商標でもお世話になり、事務所の弁理士飯田伸行氏とは俳句の御縁も出来、ホトトギス同人にもなつて頂き現在に至つてゐる。

三菱ビルの同じ階のテナントは「Zプラス」という貸会議室の会社で、毎日色々な団体のイベントが開かれており、金子兜太氏の講演会が行われた事もあり、氏とお話をした事もあつた。この会社のスタッフとも懇意にさせて頂き、一度この会議室を会場として「ホトトギス社吟行会」を開催した事もある。もう一つ同じ階には、慶應義塾大学の丸の内キャンパスという学校の施設もあり、学生さんもよく見掛けたものである。此処のスタッフとは挨拶を交す程の御縁であつたが、この稿を認めているのは平成五年八月も末であり、今年の甲子園の全国高校野球選手権大会では慶應義塾高校が百七年振りに優勝したのが記憶に新しいところである。そんな御縁もあつたのだと改めて思い出したが、慶應絡みの御縁といえるかどうか、ホトトギスが創刊百年を迎えた当時の三菱地所の社長様が福澤武氏という方で、慶應創設の福澤諭吉の曾孫である。創刊百年記念祝賀会には御出席下さり、素晴らしい御祝辞を頂いたのも忘れられない御縁である。

旬日記 廣太郎

令和四年十一月二日 NHK文化センター

ビル風の色の変わりて暮の秋
柳散る川の流れを褥とし

十一月三日 蕉心会

澄む水に八頭身の揺れてをり
行秋の畏にはまつてゆく大地
朝寒や岩に丸まる鷺虚ろ

十一月六日 野分会菅屋例会ハイブリッド句会

冬晴に解かれてゆく庭の黙
ラテン語の墓碑鎮もりて冬日和

十一月六日 青風会菅屋例会

大川の芥に偲ぶ桃青忌

石菰明り目覚めさせた森の精
芭蕉忌や現代俳句てふ虚ろ

十一月七日 刈谷市民俳句大会

三河路に再会果たし冬立てり
久々に降り立つ刈谷冬ぬくし

十一月八日 大阪倶楽部

義仲寺の大綿君の化身とも

日輪に大綿の羽色放ち

十一月九日 「玉藻」一千百号祝句

小春日に乘せ遙かより祝ぎ心

十一月十日 土筆会

神の留守都市の喧騒途切れざる
茶の花の揺れて揺れざる日の斑かな
空也忌や山門不幸続く寺

十一月十一日 「俳句界」選者競詠

名園の標となりて石菰明り
冬ざれの園に蠢く命かな
落葉積む嵩に歴史を重ねつつ
浮寝して即かず離れず鴨の陣
神の留守空路の変わりゆく都心

十一月十一日 「円虹」出句

雌一羽雄二羽鴨の修羅場かな
増えてゆく鴨に水面の艶めける
漣を袈裟懸けにして鴨の水尾
小春日を風が攫つてゆく刹那

十一月十一日 工業倶楽部

能登時雨湖北しぐれを乗り継ぎて
時雨るるや黄泉の消息語るかに

鷹渡る三河の空を狭めつつ

十一月十二、十三日 関西ホトトギス同人会、大会

初冬の節目となりし集ひかな

整然と街雑然と冬紅葉

十一月十四日 朝日カルチャー若草句会

梯を追うて木の葉の散りゆけり

帰り花奇跡信じる人とゐて

悼む会重ね重ねて初冬かな

街路樹の木の葉時雨の描く未来

魂を天に送りて帰り花

十一月十五日 きさらぎ会

茶の花に音無き雨の安息日

切干に女将の工夫てふ老舗

天帝も笑まふ茶の花日和かな

十一月十六日 北國文芸選者吟

石路の黄に人工島の未来秘め

十一月十七日 前議員句会

官邸の主は留守や冬紅葉

二の酉を終へしバス停てふ修羅場

アスファルト音階奏で枯葉舞ふ

十一月十七日 前議員句会新春詠

初明り故郷の山河明かしゆく

初凧や水平線を近付け

初雀主亡き庭啄めり

十一月十七日 登高会

初時雨立山に日を置き去りに

冬紅葉暮れゆく空を染め上げて

初時雨お茶屋の軒を借りもして

大根煮る古女房といふレシピ

十一月十七日 摩耶山俳句大会出句

冬紅葉摩耶六甲を染め上げて

摩耶小春百万ドルの夜景置き

十一月十八日 廣邦会

神の杜鳥語に守られ神無月

逆光を弾き返して帰り花

独身を通す弟神無月

十一月十九、二十日 中国ホトトギス同人会、大会

小春日や二つの富士を跨ぐ旅

冬雲の変幻伯耆富士孤高

大山の稜線冬日撥ね返し

化身めく松虫草の帰り花

白鳥の飛びて緊張解く水面

十一月二十一日 有恒俳句会選者吟

大綿の青々と舞ふ忌日かな
綿虫の群れて日差を裏返す
大綿の弾き返せる虚空かな

十一月二十二日若水句会

涙雨めく故郷の初時雨
天国の階段一步づつ落葉
麦蒔を指呼に国境警備兵

十一月二十三日 目黒学園句会

小春日や魂天に吸はれさう
日輪を目指す小春の観覧車
聖堂の開け放たれて小六月

十一月二十七日 青嵐会東京例会選者吟

一と本の古木最も冬紅葉
帰り花空より白く輝けり
神無月ゲートボールの音澄めり

十一月二十七日 野分会東京例会

クラクシヨン午後の音色や冬日和
十一月二十九日 不動の庭で遊ぶ会

虚子句碑の天蓋として冬紅葉
落葉踏む不動の庭といふ音色

一山は木の葉時雨の浄土かな

十一月三十日 カトリック新聞選者吟

曇天を持ち上げてゐる冬木立

雑詠 廣太郎 選

火の山の万緑雲へ攻め上る 鹿兒島 上迫和海
 梅雨夕焼残すホテルの百の窓 同 同
 紫陽花といふ色けふのインクの名 同 同
 雨に日に風に咲きつぎ薔薇の庭 龍ヶ崎 今橋眞理子
 四葩てふひとかたまりの雨雫 同 同
 百合ひらく白極めたる苔より 同 同
 生きてゐる限り励めと風五月 相模原 木村享史
 生きてさへをれば乾坤風薫る 同 同
 かがやける五月卒寿をまだ生きて 同 同
 青梅の雨に膨らむきのふけふ 神戸 山田佳乃
 黒南風の呼び集めたる雲の翳 同 同
 紫蘇壺を開けて薄闇放ちけり 同 同
 候といくたび謡ひ能涼し 同 和田華凜
 白扇にある一門の志 同 同
 てのひらに息をしてゐる蚩かな 同 同
 遅れ聞く訃音の二つ梅雨に入る 東京 田丸千種
 入梅やビルたらたらと灯を流す 同 同
 青梅雨や一日一章書き写す 同 同

うっしよの平家蚩の幽き火 神戸 涌羅由美
 ドロップのやうな指輪を買ふ夜店 同 同
 黒南風やチヨークの軋む五時間目 同 同
 行春や亡き師慕ひし友も逝く 長岡 安原 葉
 明易や一人暮しの一仕事 同 同
 薫風や一人暮しのティータイム 同 同
 サイダーの泡起き抜けの喉鳴らし 横浜 高浜礼子
 夫だけ苦手西瓜を貰ひけり 同 同
 食卓に旅の朶とさくららんぼ 同 同
 山開人の一步は小さかり 神戸 藤井啓子
 明日の朝生まるる仔牛夏炬焚く 同 同
 火のカムイ風のカムイへ夏炬焚く 同 同
 鹿の子跳ね野は輝きに満ちてをり 袋井 湖東紀子
 去年まで似合ひたる色更衣 同 同
 五月雨の線の中なる山河かな 同 同
 不揃ひを風が撫でゆく植田かな 枚方 中嶋陽太
 畦越えてこえて雲行く植田かな 同 同
 迂回路を探す出水の高架下 同 同
 チューリップ銀座の小さき土に咲く 渋川 木暮陶句郎
 柳絮とぶ海の蒼さに触れながら 同 同
 接木して別の未来を創りけり 同 同
 菖蒲園水の流れの果て知らず 熊本 岩岡中正
 麦の秋睡魔は遠くより来たる 同 同
 青梅も青柿もただ眩しかり 同 同

雑詠句評（十月号より）

ハビリに励んでおられる。それこそ大病に打ち勝った何とも清々しい喜びが季節にぴったりである。（廣太郎）

トラックが走る去年の荷今年の荷

静岡

須藤常史

新年を迎えても街は動いており、働いている人がいる。

荷物を載せたトラックがせわしく走り去ったのを目にして、作者は慌ただしく過ぎ去る時の流れを感じ入ったのであろう。

トラックが走り去ったのは年が改まったばかりの夜なのか、たった一台だったのかなど、何も描かれていない。このことが却って読み手にイメージを膨らませてくれている。

今日的な去年今年の詠みぶりであり共感が得られる一句である。（しげ人）

貨物トラックは、仕事の内容によつては、年の暮も正月も無く働いている事もあるだろう。この句のトラックも大晦日から正月を跨いで荷物を運びつづけているのである。去年今年の季節が、忙しさとなって伝わってくる。（廣太郎）

死神に克ち春光に蘇る

相模原

木村享史

作者は急な病に斃れられ今はリハビリ中であると聞いている。

この句はまさに作者自身の句であろう。死神との死闘に克つて春光の中を蘇つて来た作者のたくましさを探い知ることが出来る。また作者は虚子を知る数少ない方の一人でもあるので、早く全快をして、私たちの永遠の指導者であつて欲しい方なのである。

先日、不思議な夢を見た。安原葉氏とこの句の作者と私と三人で、虚子の奥様の糸夫人を庵に訪ねた夢なのである。私は糸夫人を直接は知らないが、これもまた何かの縁なのであろう。

「蘇る」は「黄泉から帰る」という意味なのでまさにぴったり、一日も早く快復することを祈るばかりである。（紀元）

作者は突然の病でお倒れになり、それこそ生死の間を彷徨われたのである。そして幸いな事にその病に見事に打ち克たれて、リ

いただきし筈に竹林の風

熊本

岩岡中正

知り合いの方から筍が届いたのだそうだ。たぶん作者はその竹林を訪れたことがあったのではないだろうか。その筍を手にするのと静かな竹林の風を受け歩いた日のことが思いだされたのだろう。

頂いた方への感謝の心とその竹林への静かな思いが感じられてしみじみとした情の感じられる句である。(佳乃)

新鮮な筍が親しい人から贈られたのである。生の筍は調理をするのに結構手間がかかるのだが、その手間を裏切らない美味しさである。調理する前の新鮮な筍が描かれているが、正に瑞々しい雰囲気が美味しそうである。(廣太郎)

黴もまた生き物そつと拭ひやる 大阪 酒井湧水

敬虔なる神父である作者らしい一句。「黴」は高温多湿の状態では食物、衣類、器具、書籍等々あらゆるものに発生する、言わば嫌われものである。その黴さえも生き物なのだからという慈悲の心を以て詠われた掲句に、なるほどと頭が下がる思いである。黴の歴史は人類よりも遥かに長いのですから……。 (しぐれ)

動物でも植物でも、人に害を与えるという存在があるが、あくまでも人間の側からの考えであり、それぞれの生物は、生存の為の当然の活動なのである。令てが神の被造物である事を知る作者

の優しさが滲み出ている。(廣太郎)

風すべり塩すべり水澄まんとす 東京 今井肖子

風がすべりゆくように水面を吹いている。すべるように吹く風は、もう夏のものではないのだろう、幾度も吹かれ、澄む水へ、秋の水へと誘われてゆく。風が秋の先導役となつて、やがてすべりが秋となつてゆくのである。(紀子)

秋になると、森羅万象全てが文字通り爽やかに感じるようになる。水澄むという清々しい季題であるが、それには風の営みも関係していると見た作者なのである。四季の違う事の無い移ろいが大景を通して見事に描かれている。(廣太郎)